

(研究ノート)

## メルヘンの発祥と特質

甲 賀 美智子

---

### キーワード

メルヘン      昔話      フェアリテール

---

### はじめに

メルヘンという呼び方について、文芸の世界にあって物語のジャンルを指すことが一般的潮流になっている。メルヘンの語源はドイツ語のメルヒェン (Märchen) である。そして、ドイツ文学の世界でメルヘンと呼ばれるものには、叙事詩、戯曲、そしてかなりの長さをもつ小説もあって範囲は広い。そうした要素を含め、口承説話を読みやすい物語に編纂、創作していったのは同じドイツのグリム兄弟の功績である。

文芸学の立場から昔話の文体研究に携わり、昔話を文芸の一ジャンルとして確立することに足跡を残したマックス・リュートイ (スイス生まれ) は、代表的著作「ヨーロッパの昔話形式と本質」(小澤俊夫訳、岩崎美術社) で昔話を VOLKSMÄRCHEN と呼んでいるが、英語の Folklore (民間説話) にあたる。一方、「メルヘンの履歴書」(慶応義塾出版) の著者宮下啓三 (当時慶応大学文学部教授) は、昔話や妖精譚を民間メルヘンと呼んでいる。

メルヘンとは何かという問いにシンプルな定義はつけられないほうが妥当だというのが、大方のメルヘン研究者の回答のようである。それほどに、多くの要素からなり、語り手のことばを通し、やがて文字にまとめられるなかで、徐々に今ある型に収まってきたものなのだ。それら昔話或いは民間メルヘンを通称メルヘンと呼ぶとして、ヨーロッパ、イギリス、日本における口承民間文芸としてのメルヘンの成り立ちと特徴に焦点をあてたい。

### メルヘンの研究領域

メルヘンの研究の歴史はたかだか2世紀程度で浅い。つまり、考古学のようにまだまだ掘り起こされ、解明され、編纂されるべき民間伝承文芸の世界は底なしとも言われる。古代からあった人間の本能的、創造的営みとも言える口承説話が文字化されていったのは16、7世紀のことである。文字化によって口承文芸として形成されてきたこの数世紀こそ、メルヘン研究の歴史と位置づけられる。研究の視点は学問が扱う分野や学派の諸説に基づいて実に活発に展開されてきた。だが、伝説や神話、民間伝承の話、リリックス (叙情詩) などの伝

播は、時代の変遷のなかで新たな伝承者を発掘する限界や、現存の伝承者の老齢など諸問題にも直面して、まさに、稀少な宝石の採掘に匹敵する状況を呈している昨今である。

研究はざっと列挙しただけでも下記のようにいくつかの分野から成る。それぞれの領域が向ける探索の視線は、人間の原初的な幻想や空想、夢想のなかで織り成されていったストーリーが、何故語り続けられ現在でもなおお色あせずに残っているのかに集約されるのではないだろうか。更なる研究と共に論議は続いていくと予想されている。

1. 民俗学：昔話を文化史的、精神的ドキュメントとして研究し、社会におけるその役割を観察する
2. 民俗宗教学：信仰と民衆の生活との関わり研究
3. 心理学：物語を心的過程の表出と考え、聞き手や読者への影響をたずねる
4. 文芸学：昔話本来の要素や特性を確認しようと努める
5. 文化人類学：各種民族の生活と話の関わり研究
6. 歴史学：昔話に反映される各時代の状況や、多くの歴史情報を探ろうとする

### メルヘンのかたち

メルヘンを解釈するには、できるだけ多くの類話を知る必要があるというのが研究上のいわば鉄則である。一つのメルヘンから一つの解釈を引き出すのは危険だからで、研究の出発点となったのが収集である。ただ、世界中には限りないおとぎ話や昔話があるだけに、収集されたものを話型に分類し、話の構造で整理し、また、話の展開の形式や特徴をとらえ、登場人物と話の展開を心理、精神分析するというアプローチが代表的な研究者によって進められ、メルヘンのかたちが特徴づけられてきている。

I. 今日、メルヘンの分類でもっとも広く用いられているのは、フィンランドの民俗学者アンティ・アールネがまとめた話型による分類である。アールネはヨーロッパで収集された約800の昔話を整理分類し、成果を「昔話の型」（機関誌『民俗学者連盟通信』）に発表した。

だが、その分類はヨーロッパ以外の地域の収集話を対象にしていなかったため、アメリカの民俗学者ステイス・トムソンが1928年と1961年に増補改訂した。二人の名前を取って、メルヘンのタイプをいう場合、AT x x x（xは番号）という表示をするのが国際的慣習になっている。二人の「昔話の型」は話のモチーフによって、①動物説話 ②本来の昔話 ③笑い話・逸話（アネクドート） ④形式譚 ⑤何れにも分類できない話の5領域に分類されているが、それは今やメルヘン研究の羅針盤ともいえるほど、二人の功績は多大である。

II. アールネ&トムソンの話型分類とは違った次元、つまり互いに類似した話の構造上の特徴に焦点をあてた構造的分類法をまとめたのはロシアの民俗学者ウラジミール・プロップである。彼は昔話の文法をあきらかにしようと努め、1928年に「昔話の形態学」を著している。鈴木晶（法政大学教授。文学批評、精神分析学の文化史・精神的専攻）の著書「グリム童話」（講談社現代新書 1999年18版参照）での解説によれば、プロップの構造主義的な先駆の仕事は30年後に、英訳が出版された1958年以降となる。「昔話はしばしば相違なる人物たちに同一の行為を行なわせる」というその行為をプロップは「機能」と呼ぶが、それは、物語の筋の展開にどんな意義をもつかという面からみた、登場人物の行為をいう。

プロップは、ロシアの昔話、特に魔法昔話を題材に用いて、①敵対者（加害者） ②贈与

者 ③助力者 ④王女（探し求められる者）とその父親 ⑤派遣者（送り出す者） ⑥主人公 ⑦ニセ主人公という7つの行動領域と31の機能に分類した。つまり、登場人物を7タイプに分類し、彼等の機能とは上述の『加害』『贈与』『助力』といった行為を示す。鈴木は同著で、プロップの形態学的分類は、ロシアだけでなく世界の他の地域の昔話にもあてはまると述べているように、アールネ&トムソンの話型分類の索引とともに、メルヘン研究にとって磐石の指針と成っている。

Ⅲ. マックス・リュートィはヨーロッパの昔話の表現上、形式上の特質を中心に研究を重ね、昔話のジャンルの法則を見つけ出そうとした。代表作に前述の「ヨーロッパの昔話 形式と本質」（小澤俊夫訳、岩崎美術社）や「昔話の本質」（野村滋訳、ちくま学芸文庫）で掲げられる主だった法則をまとめると次のようになる。

- ①単純な筋立てと図形的な登場人物は話の輪郭をはっきりさせる
- ②登場人物は単数で孤立して動く。聞き手は語りことばからイメージ（絵）に変えやすい
- ③表現は非写実的で平面的である。暴力や残虐シーンのリアルな描写ぬきで、坦々と進む
- ④大抵、話は三層のリズムで組み立てられ、展開ははっきりとわかりやすい
- ⑤主人公は大抵、自分の決断でなく、外部からの力（助言、贈り物、運命の打撃など）に促されて成長という旅を進める

リュートィは昔話のメッセージは、人間像、人間と自然のかかわり、そして生命のあり方という3つのメッセージを描いているとしつつ、各民族や文化によってその特質は異なるだろうし、研究が必要だと提言している。もっとも、リュートィと直接交流し、自ら日本の昔話の研究を続けている小沢俊夫によれば、リュートィの昔話の文芸的特質と法則は、日本を含むアジアにあっても見事な整合性を見せるという（國學院大學『語りの文化講座』にて：6/12'10）。

メルヘンの形式的特徴をとらえることは、研究は無論だが、読み方、聞き方においても、知っているのと知らないでは、味わい方に違いがでるだろう。時を経て語り継がれてきたメルヘンにそうした形式が自ずと備わっていた事実があるとすれば、時、場所を問わず、人間の無意識的な心の働きかけがあったという心理学、精神分析的解釈は興味深い。

Ⅳ. メルヘンが生まれ形づくられてきた経緯から、時代や場所を超えて同じような話が語られている点に注目して、心理的な起因で捉えようとするのは心理学、精神分析的アプローチである。彼等はメルヘンを夢の解釈と同じような方法でとらえていた。

人の心の無意識のレベルまでメスをいれ、種々の精神的心理的問題の解明を試みたのはオーストリアの精神分析学者ジークムント・フロイト（1900年「夢判断」出版）である。フロイト理論を受け継ぐ、ヴィルヘルム・ヴントは20世紀初め、神話の発生源は太古の世界の人々が抱いた悪霊や魔法に対する恐怖だったという仮説をたてて、原始の人々の恐怖や不安が、時代を経ながら人間の夢になって現れだしたと唱えた。また、同じくフロイト派のブルーノ・ベッテルハイム（『昔話の魔力』は波多野乾訳 評論社1978）は、メルヘンについて人間が生きてゆく途上出会う基本的諸問題、とくに成長過程の心理的問題を文学という形で表現したというもので、登場人物が『旅』に出るのは成長過程の象徴という解釈にたつ。

一方、スイスの心理学者カール・ユングはフロイト等の夢の解釈に対して、『集合的無意識』という仮説をたて、集合的無意識の機能的単位を研究するユング心理学の素地を固めて

いった。その機能的単位を元型（アーキタイプ）と名づけた。英国の心理学者でユング研究家のアンソニー・ステイーヴンスの著書「ユング」（鈴木晶訳 講談社選書メチエ42 1998年4版）による説明では、「元型は、階級、宗教、人種、地理的位置、歴史的時代に関わりなく、人間のうちに似たような思考、イメージ、神話素、感情、観念を生じさせる」。

現在もメルヘンへの心理学的研究はユングの集合無意識の理論に沿って盛んで人気があるが、時代や地域、文化、民族などに関係なく、似通ったメルヘンが偏在するのは何故かという一般的疑問への回答として納得がいくと同時に、ユング理論への関心はかきたてられる。日本ではユング心理学者、河合隼雄にメルヘン研究に関する著作が多く、読みものとしても面白い。一方、上述の鈴木晶は自著「グリム童話」で精神分析的メルヘン解釈の欠点を2点：①最大の欠点は、現在広く読まれているメルヘン、特にグリム童話を古くから語り継がれてきたものと見なしている ②精神分析的解釈では一つの話を取りあげて、類話を無視しているという点をあげている。そんな評価も踏まえるなら、同領域の研究材料の活用や、研究それ自体も他の領域での研究との協働を模索してもよいのではなかろうか。

### ヨーロッパ民間伝承話の文字化とメルヘン

口承民間文芸の収集、編纂、創作編集のヨーロッパにおける功績者は内外ともにグリム兄弟の名が轟いている。だが、彼らの前に先輩の功績者は数知れず存在したのである。ヨーロッパの昔話研究の第一人者で、ゲルマン学者、民族学者のF.ライエンが著した「メルヘン（昔話）」（山室静訳 岩崎美術社 1976年）によれば、紀元前6世紀のギリシャとインドでメルヘンは大きな開花期を迎えた。その後、11世紀の十字軍へと続く世紀は隆盛期というほど、メルヘンの歴史は長い。同じ時期、東方ではカシミールの詩人ソーマデーヴァの「パンチャタントラ」、エジプトでは「千夜一夜物語」が生まれた。西方では大掛かりな神学体系がまとめられたが、それはメルヘン、伝説、口碑の多くを包含していたと言う。

イタリアーでは、ラテン語の説話集をもとに多くのノベルレ（短編、奇譚）とメルヘン集が生まれた。ボッカチオの「デカメロン」、ストラパロラの「いとも楽しき三十夜」、そしてナポリの代表的詩人・作家ジャンバティスタ・バジール「ペンタメローネ」（「五日物語：1634-36年に編纂」と続く）。

ペンタメローネで語られた話のいくつかは更に、フランスのシャルル・ペロー（「韻文による物語」1695年出版。続いて散文による「寓意にある昔話」通称「ペロー童話」をまとめる）、それから100年余を経て、ドイツのグリム兄弟の「昔話集」（子どもと家庭のメルヘン、1812-14）に伝わったとされる。いくつか例をあげても、ペローの「青ひげ」や、グリム童話の代表的な話とされる「サンドリヨン」（「シンデレラ」）、「白雪姫」、「赤ずきん」などがあるが、それらとてペローが集めた或いは創作した話が先だと論説かまびすしい。だが、ペンタメローネを読むと、それら多くはバジールの物語の要素が土台になっているのがわかる。もっとも、ライエンは、「ペンタメローネ」の大部分はインドのメルヘンに基づくと言う。メルヘンの世界的な分布の跡を辿る研究も、まさに終わりのない旅にも似ている。

4

### メルヘンと日本のお伽話、昔話、民話の関係

日本では明治時代に渡来した『メルヘン』という呼び名は、a) お伽噺、b) 昔噺、c) 西洋妖怪奇談、d) 奇異談、e) おさな物語などと訳されたが、a) と b) が定着していった。そもそもメルヘンは子供に向けて語られ、伝えられてきたものではないのだが、日本の

文芸史上、子供にあてたお話と位置づけられ、20世紀早々には『童話』という言葉が編み出された。実際、伝承された話を編纂したグリム兄弟のメルヘンはそもそも子供に向けたものではなく、残酷だったり性的な描写もふんだんだったが、二人はそれらを削り、家庭で子供にも読み聞かせることができるように幾度も改定している。

1891年（明治24年）、アンデルセンの物語を日本の少年少女向きに編纂して、お伽話と名づけたのは巖谷小波である。そのお伽話は、いつの間にか「就寝前子どもに読み聞かせる話」という意味になっていった。一方、口承文芸研究で多大な貢献を残した民俗学の大家、柳田国男はグリム兄弟の収集説話を『昔話』と呼んだ。お伽とは主人や目上の人と同席して寝ずに夜を過ごすことを意味する。つまり、宗教的或いは軍事的に大事な状況で、眠らないように面白い話をしたり、聞いたりするのであって、子供に関係のない風習だったという。童話と一緒にするのは事実と反するし、昔話を童話とするのは誤訳であると明言している。また、柳田は20世紀後半に広まった『民話』という呼称についても、「昔話覚書」のなかで日本の昔から根付いていない語だと指摘した。

### 日本の童話、児童文学への流れ

ちなみに、AERA MOOK『童話学が分る』（1999年3月10日朝日新聞社発行）の日本童話変遷史（「童話学への招待」で野上暁解説）によれば、子供の読み物の呼称は、明治期の『お伽噺』、大正期の『童話』そして昭和期以降の『児童文学』と三段階を経ている。童話という呼び名はいつからとは明確ではないが、江戸時代後期の山東京伝の「骨董集」上編中の巻二十一条「打出小槌、猿蟹合戦」では童話と書いて（むかしばなし）、（どうわ）両方の読み方をさせている。一方、滝沢馬琴は「燕石雑誌」巻之四で猿蟹合戦、桃太郎、舌切り雀、花咲翁、兎大手柄、猿候の生肝、浦島之子など七つの民間説話の由来などを分析しているが、馬琴はそれらを童話（わらべものがたり）と読ませているとある。

結局、いずれもメルヘンの意味にじっくり来ないのが実情で、それならいっそ『メルヘン』と呼ぼうということに落ち着いた経緯がある。ただ、こうした紆余曲折を経た日本のメルヘンについて、前述の宮下啓三は次のように問題点を指摘している。「…昔話とか民話、あるいはお伽話と呼ばれるような、無名の人々が語りつたえてきたような「むかし、あるところに」ではじまる話ばかりでもない。そのようなものとはちがうことを強調しようとする人たちは、意味をせばめる日本語を捨てて、幻想的で心なごませる物語をメルヘンと呼んだのだが、これが逆にメルヘンの範囲をせばめる結果になってしまった…」と。これから先、日本におけるメルヘンの定義や呼び方の再考、改変もあるのかもしれない。

### イギリスの民話

イギリスでは日本の童話の意味合いにあたる民話を『フェアリー・テール（妖精物語）』とよぶ。井村君江（イギリス・アイルランド・フォークロア学会会員。明星大教授）は自著「ケルト妖精学」（講談社学術文庫）で、ドイツ語のメルヒェンと同じように、その国特有の意味、概念に支えられて、他国の言葉で表しにくいニュアンスがあると解説している。更に、フェアリー・テールは妖精が登場する物語の代名詞であるが、彼らが活躍しなくても、昔話、おとぎ話、民話、説話、伝説など民間伝承文学も含めた総称になっている。現在では『フォーク・テールズ』と同じ意味で用いられていると言う。フォークロアという語は、民間故事と民間文学双方を包括させようという意図のもとで用いられるようになり、民族学も含めた広

義の概念としてフォークロア（民俗学）という言葉が19世紀あたりに定着したとされる。

井村はイギリスのフォーク・テールズ研究の第一人者キャサリン・ブリッグス女史（『英国昔話辞典』4巻は研究の集大成と目されている）の足跡を追い、「妖精Who's Who」を編訳（ちくま文庫）している。それは女史が無数の妖精のなかから101の妖精を選んで解説したものだが、それらの派生や属性も含めて次のように4大別している。すなわち、1）国をなす妖精－英雄妖精、群れる妖精、フレンドリーな妖精 2）守護妖精 3）自然の妖精 4）怪物、魔女、巨人である。そこから見える事実はスコットランド、ウェールズ、イングランド、アイルランド各地には古くから妖精信仰が根づいていたこと。住人たちは知恵を駆使し、賢くさまざまな妖精と付き合っていて楽しみ、恐れ、信心深く生きたという点で、それ故に、多くの伝承にかたどられて、やがて文学、詩や戯曲、小説の世界を広げていった経緯が見てとれる。

妖精の国でくり広げられる物語は願望実現の夢でなく、現実の人間世界と妖精の住む時間と死のない国の対比のなかで不思議な悲しい話が主となるのが特徴である。ヨーロッパでの典型的ハッピーエンディングのメルヘンは英国では極度にとぼしくなっている。キャサリン・ブリッグス女史の「英国民話」は92の民話を収めるが、その内、魔法民話は6編だけにとどまる。他は、伝説、巨人、幽霊、聖者の話、笑い話、ほら話が収集され、とりわけ実際にあったことの言い伝え、伝説（デーゲン）が中心であることがイギリスの民話の特徴となっている。

なかでも、妖精の存在と活躍で顕著なのはアイルランドである。W.B.イエイツは「アイルランド各地方の妖精譚と民話」（Fairy and Folk Tales of the Irish Peasantry 1888）、「アイルランドの妖精譚」（Irish Fairy Tales 1892）など編纂している。前述の井村君江はそれらの何篇かを「ケルト妖精物語」「ケルト幻想物語」（何れもちくま文庫）に編訳しているが、前著の付録でイエイツはフェアリーを分類している。それはブリッグス女史の四大別に対し、妖精の習性から、（1）群れをなす妖精 （2）一人暮らしの妖精の二大別になっている。

編者は「アイルランドではこの世と死後の国は隣同士」であり、「異界は神話ではなくて現実なのだ」と言う。妖精は神なる先住民族であり、また単に死者でもある。若死にしたもの、死産した嬰兒と限定したりもする。Wales高地、Cornwall地方では妖精をスピリット（精）とよび、死者の靈魂の意味が強い。願望や夢の実現と幸せなエンディングのメルヘンはフィクションの性質を備えているのに対し、妖精物語は妖精と人間の関わりについての言い伝えや民間信仰に基づいている。

「ファンタジーの系譜」（中京出版）を著した杉山洋子は同著で、古代アイルランドにあったケルトの古代宗教というべきドルイド思想に触れている。それは『靈魂不滅』『輪廻転生』の信仰であり、死はもう一つの生の入り口という死生観からなり、その考え方は妖精達に受け継がれていると言う。すなわち、妖精は古代ケルト民族の異教の神々だったが、やがて、キリスト教的発想が加わって、妖精は墮落天使となる。天国へ行けないが、地獄に落ちもしない死者たちが妖精になると考えられ、それら妖精は悪鬼（Devil）と呼ばれるようになる。妖精が人間に及ぼす影響は消極的だが、妖精の国の属性である永遠、無時間性という決定的な力を持つ。日本では妖精でなくもっばら妖怪と呼ばれる存在がいて信仰や畏怖の対象だったが、現在ではもっばらアニメの世界の立役者として存在するだけで、神秘性や畏敬の念が薄れてしまったのは何か哀れであり、もの悲しくもある。ただ、どこかひょうきんで、憎めないアニメや映像のキャラクターから、昔話への関心の糸口が広がる可能性もあると思えば、そう悲観することもないのかもしれない。

今日に受け継がれるメルヘン・グリムとアンデルセン

1990年の半ばに宮下が行ったメルヘンに関する意識調査を特記したい。宮下は前述の「メルヘンの履歴書」(慶応義塾出版)で二つの質問をしている。一つは「日本昔話のうちあなたがよく知っていて親しみを感じる話のタイトル、または主人公の名前を五つあげてください」というもの。二つ目は「外国の昔話・童話であなたがとくに親しく、なつかしく感じている話のタイトル、または主人公の名前を五つあげてください」である。調査に応じた人の数は627人、20歳前後から60歳代にのぼった。日本部門と外国童話ベストテンを次にあげる。日本部門上位の5作品は、江戸時代すでに『日本五大昔話』と呼ばれていたものであるのは、昔話は親から子、子から孫へと語り継がれていることを物語っていると見えよう。

日本昔話		外国昔話・童話	
1. 桃太郎	474	1. 灰かぶり [シンデレラ]	408
2. 浦島太郎	294	2. 白雪姫	380
3. かぐや姫	291	3. 赤ずきん	238
4. 一寸法師	256	4. マッチ売りの少女	180
5. 花咲翁	219	5. 人魚姫	155
6. 猿蟹合戦	215	6. ヘンゼルとグレーテル	139
7. かちかち山	178	7. みにくいアヒルの子	104
8. 金太郎	164	8. おやゆび姫	103
9. 舌切雀	131	9. 三匹の子豚	85
10. 鶴の恩返し	122	10. ジャックと豆の木	76

(前述書 p 15～)

この調査の画期的な点は外国昔話・童話ベストテンに、アンデルセンの創作童話(創作メルヘンと呼ばれる)が4つも入っている点である。つまり、4, 5, 7, 8はアンデルセンの作品で、2, 3, 6はグリムが集めた昔話である。灰かぶりはフランスのペローが先に集めた或いはまとめたともいわれ断定できない。9, 10はイギリスで生まれた話である。

メルヘンとは作者を意識しないでただ、楽しく読み、聞いてきた。語る側からすれば、文字でなく、ことばで伝えるのに、ストーリー展開は単純でわかりやすくなくてはならなかった。また、印象深く、聞き手の記憶にとどめてもらうためにも、単純性、形式性、象徴性、孤立性などのメルヘンにみる法則が必要とされたと理解される。その意義を無視する向きからは単純すぎるとか子どもっぽいなど批判もあがりそうだが、れっきとした文芸の一形態である。文字の生まれぬ太古の昔から人間がもちうる想像力と表現力、創造力或いは潜在意識を駆使して伝えてきた遺産を新鮮な感覚でとらえ直し、味わうことで更に新たな視点、とらえ方も生まれると予測できる。この上ない宝のような情報が埋まっている貴重で魅力溢れる分野である。

参考文献

「ヨーロッパの昔話 形式と本質」(マックス・リュウティ著 小澤俊夫訳 岩崎美術社 1969年 4版)  
 「昔話 その美学と人間像」(マックス・リュウティ著 小澤俊夫訳 岩波書店 1986年)  
 「昔話の本質」(マックス・リュウティ著 野村法訳 ちくま学芸文庫 1994年)  
 「メルヘン(昔話)」(F.ライエン著 山室静訳 岩崎美術社 1976年)

- 「昔話の魔力」(ブルーノ・ベッテルハイム著 波多野乾訳 評論社 1978年)  
「昔話の形態学」(ウラジミール・プロップ著 北岡誠司/福岡美智代訳 白馬書房 1987年)  
「メルヘンの深層」(森義信著 講談社現代叢書 1995年)  
「メルヘンの履歴書」(宮下啓三著 慶応義塾出版 1997年)  
「グリム童話の誕生」(小沢俊夫著 朝日選書 1999年 3版)  
「ユング」(アンソニー・スティーヴンス著 鈴木晶訳 講談社選書メチエ42 1998年 4版)  
「グリム童話」(鈴木晶著 講談社現代叢書 1999年 18版)  
「ファンタジーの系譜-妖精物語から夢想小説へ」(杉山洋子著 中京出版 初版1979年)  
「ペンタメローネ(五日物語)」(ジャンバティスタ・バジーレ著 杉山洋子/三宅忠明訳  
ちくま文庫 2005年)  
「『ペンタメローネ』の女性たち」(杉山洋子著 口承文芸研究33号 口承文芸学界 2010年)  
「ケルト妖精学」(井村君江著 講談社学術文庫 1996年)  
「妖精Wh's Who」(キャサリン・ブリッグズ著 井村君江訳 ちくま文庫 1998年)  
「ケルト妖精物語」(W.B.イエイツ編 井村君江編訳 ちくま文庫 2007年)  
「ケルト幻想物語」( 同上 )  
「童話学が分る」(AERA MOOK 朝日新聞社 1999年3月)

(受理 平成22年9月27日)